

NGO 研修プログラム報告書

(社) シャンティ国際ボランティア会

上智大学経済学部 2年 田中 友実

【Theme】

今回 SVA の研修プログラムに参加するにあたり、私は一つのテーマを設定しました。

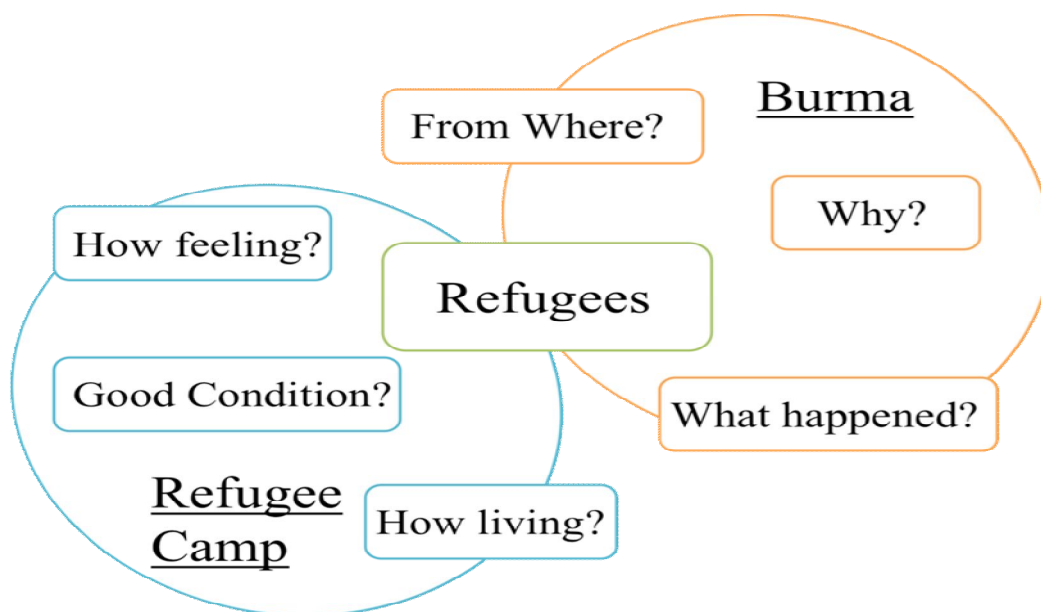
難民の方々の“顔、気持ち”を知る
To Understand “The Face and The Feeling of Refugees”

【Plan for Learning】

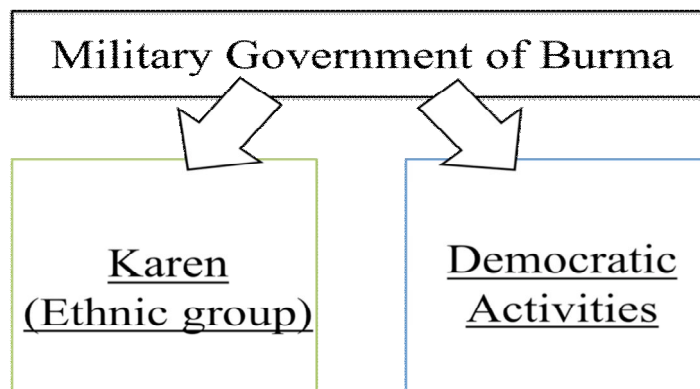
“行けば何かわかる” とかたくなに信じていた私。しかし最初にメータオクリニック、続いてメラキャンプを訪れその考えを完全に否定されてしまいました。“人に話を聞く” “その人のおかれている状況を少しでも共有する” という行為は私が思っていたよりも遥かにエネルギーを有することであり、私の方でもそれ相当の心構えが必要なことだったのです。中途半端な姿勢では何も得られないし、むしろそこにいることすら恥ずかしいということによりやく気がつきました。スタッフさんのアドバイスに従い、自分は本当に何を知りたいのか、どのように聞けばその答えを得られるのか、聞いたことをどのようにしてテーマに近づけていくのかをまずは改めて考え直すこととなりました。

① Background のインプット

本や事務所でいただいた情報をもとに、難民の方々がおかれている状況を自分の中でイメージしていきました。この過程を踏んだおかげで難民問題＝キャンプではなく、彼らのバックグラウンドであるビルマの軍事政権を考えるようになったと思います。難民の方々を理解するためには彼らの「現在」である難民キャンプでの生活だけではなく、彼らの「過去」であるビルマ国内での経験も共有しなければなりません。それに伴い興味は自然とビルマの軍事政権へも広がっていきました。



In Burma



② インタビュー原稿の構想

①の過程で“聞きたいこと”が固まった後に、具体的なインタビュー原稿を作成してきました。最初のうち私は、質問に答える側(難民の方々)の立場を全く考慮せずに、自分の聞きたいことを全て盛り込んだインタビュー原稿を作っていました。しかしスタッフさんからアドバイスをいただき、どのような質問の仕方なら答えやすいのか、いかにして相手が答えやすい雰囲気をつくり出すか、という点に焦点をあててインタビュー原稿を完成させることができたと思います。またこのころから“人に話を聞く姿勢”についても考えるようになりました。

③ インタビューの練習/リバイズ

完成したインタビュー原稿を使って、事務所のスタッフさん相手にインタビューの練習をしました。所長さんからアドバイスをいただき練習をしたのですが(これまでのスタッフさんのアドバイスもほとんどは所長さんからのものです)これによって随分とインタビューの内容が詰められたと思います。自分が思っているよりも聞かれている相手は話をしてくれないということや、自由に話してくれと言うだけでは何も話せない、むしろ話しづらいということ。人から話を引き出すことの難しさを痛感しました。仕事中でも関わらず何人ものスタッフさんからアドバイスをいただくことができ、ようやくインタビュー原稿が完成しました。

④ インタビュー

このインタビュー原稿はメラキャンプ、ウンピウムキャンプだけでなく、メータオクリニックやAAPPBでのインタビューにおいても用いることとなりました。キャンプでのインタビューではまず通訳の方(SVAの図書館員の方)とのコミュニケーションを大事にしました。自分の質問の意図を伝えると同時に、通訳の方との信頼関係も大切であると思ったからです。メラキャンプでは4人、ウンピウムキャンプでは2人の難民の方(私は友

NGO 研修プログラム報告書

2010/09/13~2010/09/30

人と思っています)と丸一日行動を共にし、インタビューの貴重な時間を一緒に共有することができました。彼らがいたおかげでインタビューに答える難民の方もリラックスできたのではないかと思います。最後に通訳をしてくれた図書館員の4人が「このインタビューに参加できて良かった」と言ってくれたことが本当に嬉しかったです。

⑤ レビュー

【Schedule】

1 週目	
9月13日	オリエンテーション/研修計画
9月14日	UNHCR との Japan promotion MTG 参加 @UNHCR メーソット事務所
9月15日	Mae Tao clinic / BMWEC 訪問 ※インタビュー
9月16日	インタビュー結果 review
9月17日	Japan promotion 参加 @メラキャンプ
2 週目	
9月20日	インタビュー原稿完成 / インタビュー練習
9月21日	メラキャンプ訪問 ※インタビュー
9月22日	メラキャンプ訪問 ※インタビュー
9月23日	Mae Tao clinic / Assistant Association Political Prisoners Burma (AAPPB)訪問 ※インタビュー
9月24日	AAPPB 訪問 ※インタビュー
3 週目	
9月27日	ウンピアムキャンプ訪問 ※インタビュー
9月28日	インタビュー結果 review
9月29日	ウンピアムキャンプ訪問 ※インタビュー
9月30日	Last Presentation

① UNHCR メーソット事務所訪問 / Japan promotion (9月14日、17日)

9月17日にメラキャンプで行なわれた Japan Promotion イベント、及び UNHCR の事務所で行なわれた事前ミーティングに参加しました。そこでこのプログラムにいかにか多くの方々関わっているか、第三国定住の難しさを肌で感じる事ができたと思います。難民の方々と UNHCR の職員の方とのやりとりには、彼らの日本に対する不安が明確に表れていました。日本人の一人として、いろいろと考えるところがあったと思います。

② Mae Tao clinic 訪問 (9月15日、23日)

ドクター・シンシアというカレン人のお医者さんがはじめたクリニックです。ビルマから来る人々や、タイにいる移民の方のためにつくられました。クリニック自体が大変有名で素晴らしいところなのですが、私はクリニックについてよりもそこを訪れる人々や関係者からビルマの現状やカレン民族に対する弾圧についての話を聞くことに専念していました。文献などである程度の状況は知っていたつもりでしたが、自分が想像している以上にビルマの医療サービスは劣悪でした。医療サービス、というよりは国の政治が全く医療方面に配慮されていないという現実があります。政治が機能しないということは、こういった人間の命に関わる分野ですらままたまらなくなってしまうという現実を突きつけられました。またカレン族の方にもお話を伺うことができました。あまりに理不尽な状況に、話を聞いているのが辛かったというのが正直な感想です。

③ BMWEC 訪問 (9月15日)

ビルマからタイに来た移民の人々のための学校です。施設は素晴らしく、教育の水準も高いのですが、タイ政府に認められた正式な学校ではないため大学には進学できません。自分と同年くらいの子が、将来を困ったように話す姿は聞いていてやりきれませんでした。(見た目は)無邪気に将来についての話をする幼い生徒たちと、成長するにつれ自分のおかれている状況や将来を理解して複雑な表情を浮かべる年輩の生徒との違いが鮮明に印象に残っています。

④ AAPPB(Assistant Association Political Prisoners Burma) (9月23日、24日)

ビルマ国内において政治犯として投獄されている、あるいは過去に投獄されていた政治活動家の方を支援する団体です。私はここで、ビルマにおいて学生団体を運営し、政治犯として5年間投獄されていた男性と話をすることができました。これまでは主にカレン民族の視点からビルマという国を見ていたので、ビルマ人の方のお話が聞けたのは良かったと思います。両者の立場の違いを再確認しつつ、改めてビルマという国がいかに軍事政権によって支配されているかを痛感しました。彼もあまりに長い祖国の軍事政権に諦めの色を隠せない反面、それでもやはりいつかはと信じ続けている姿が印象的でした。

【The situation in Refugee camps】

難民キャンプの最初の印象は「ひとつのコミュニティー」でした。想像していた以上にモノが溢れ、ささやかながら市場が形成されており、統治組織もしっかりとしている。外との交流がないだけで、ここはしっかりとコミュニティーとしての機能を備えているのではないかと妙に感心してしまった記憶があります。愚かながら、ここに市場の流れ(雇用、流通、金融 etc...)さえ創れば、難民の方達はここで幸せに暮らせるのではないかと思ひ、必死にそ

のシステムを頭の中で考えていました。実際に最低限の衣食住は支援によって保障され、一見豊かな暮らしを送っているように思います。しかし実際に難民の方とお話をすると、いかに自分の考えが浅はかであったかを痛感しました。“難民である”ということが自分とは全く異なる立場にいるということ。彼らと自分との間に大きな溝を感じました。その溝は想像を絶する程深く、彼らと別れるときに「また…」と言えないことが、陳腐な言葉ではありますが“住んでいる世界が違うのだ”と思い知らされ、涙が止まらなくなりました。

“自由がない”ということがどんなに彼らを苦しめているか、当たり前のように自由を享受してきた私には到底理解しきれないと思います。

インタビューにおいて、現在の NGO、UNHCR の支援に満足している、ビルマにいるよりも暮らしが良いと話す一方で、第三国定住などの将来の見通しが無い難民の方々は不安を隠せないでいます。自分は話を聞くだけで、何もできないと自己嫌悪に陥ったこともありましたが、それでもインタビュー後、見送ってくれるときの難民の方々の笑顔を見ると、自分がここに来た意味はあったのかもしれないと、許されたような気がしました。

【Future Perspective】

今回の研修では本当に多くの方々と出会い、お話をする機会に恵まれました。事務所のスタッフの方々はもちろんのこと、キャンプで知り合った難民の方々、友人、そして関係者の方。彼らと過ごした時間、彼らと話したことは私の一生の宝物であると同時に、決して忘れてはならない言葉だと思っています。そしてこれから自分には何ができるのか、それを考えていくことが私の彼らにできる唯一の恩返しであり、彼らから話を聞いた者としての責任の果たし方なのではないかと考えています。